慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「僕」と「社会」の交渉をめぐる力学：中上健次「不満足」・「日本語について」・「あなたを愛撫するユビ」論
Sub Title	
Author	浅野, 麗(Asano, Urara)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.47 (2008. 6) ,p.53- 66
JaLC DOI	10.14991/002.20080600-0053
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20080600-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「僕」と「社会」の交渉をめぐる力学

―中上健次「不満足」・「日本語について」・「あなたを愛撫するユビ」論―

浅野　麗

1　はじめに―本稿の位置づけ―

本稿は、中上健次の初期小説「不満足」、「日本語について」、「あなたを愛撫するユビ」の分析を主眼とするが、その前に、その意義を明らかにする。というのも論者は、これら小説の分析を基に、中上健次の〈初期詩〉を考察する意図を持つからである。まず、〈初期詩〉考察の意義を述べ、次に、それに対して小説分析が持つ意味を示したい。

中上健次は、一九六六年から一九六九年にかけて十七篇の詩作品を発表した。それらは主に一九六八年のもので、発表媒体も地方版日曜新聞『さんでージャーナル』（和歌山県新宮市発行）にほぼ限定される。そして、これらの詩がこれまで研究対象とされた形跡はない。言及されたとしても、例えば中上の初期小説（「JAZZ」、「遠い夏」（後「隆男と美津子」）『文藝首都』・一九六六年十二月～）の扱われ方に等しく、「灰色のコカコーラ」（『早稲田文学』一九七二年十二月号）や「岬」（『文学界』一九七五年十月号）のプレ・テクストという位置を与えられるとともに、詩であるがゆえの特有のバイアスがかけられる。例えば高澤秀次は「六八年の「四十五回転盤季節と若干の問題」、「故郷を葬る歌」の二篇の詩で、「中上の詩的精神はほぼ燃焼し尽く」し、その「詩魂は、完全に散文精神の側に奪われ」たと述べる。特に「故郷を葬る歌」において中上は、「母親を筆頭に、義父、実父、三人の姉の実名を記して「殺せ」の一語を浴びせかけ」、「故郷を葬り、自らの退路を断」ち、「ここから反転して、詩的に葬り去った一族と故郷からの散文的報復を引受」けねばならない事態に陥ったとされている。[1]

評伝的記述ゆえに仕方のないことだが、この認識は、詩人でなく小説家にならねばならなかった中上健次という作家イメージを前提とするため、後続する小説との関わりのなかで捉え直される詩作品の言葉は、「詩的精神」の反映として切り縮められる。またさらに高澤は、「故郷を葬り、自らの退路を断った」中上には、「自らの血の宿命を直視し、紀州熊野の風土の中に、出自としての被差別部落をどう描き出すかという課題しか残されてはいなかった」という筋書きを付け足している。が、中上の作家的資質からしても、「自らの血の宿命」と「出自としての被差別部落」を描き出す「課題」発見に至るコンテクストは

重要であり、そうであれば、それが発見されたと言えるのかも含め、どのように発見されたのか、具体的な検証が必要となるだろう。それは、「故郷を葬る歌」に至るまでの、生地・新宮が仮構されてきたプロセスを検証することと同義である。

この時期の創作において、新宮が登場するのは、地元紙掲載の詩にほぼ限定され、小説は、都市の〈若者〉をめぐる問題系をストーリーの軸とする。創作が、『さんでージャーナル』に発表された詩と『文藝首都』に発表された小説とに分岐しているという事実[2]も鑑みるなら、それぞれの創作ジャンルの差異に留意しつつ、「故郷」というモチーフが構造化された表象空間を厳密に再現し、高澤の言う「課題」がいかにもたらされたのかを考察しなければならないだろう。

さて、一九六七年九月、『文藝首都』に発表された「海へ」を「散文詩的小説」とし、「やがてそれぞれに独立した作品として立ち上がる〈記憶〉と〈分身〉の主題」の交錯を精緻に分析したのは菅原真以子だが[3]、論者の考察対象は、この「海へ」直後に発表された詩と小説になる。「〈記憶〉」の主題は、〈故郷〉というモチーフと不可分だが、そのモチーフを持つ詩が『さんでージャーナル』という新宮メディアとの緊張関係のなかで生成されることに留意すれば、何が見えるのか。この観点からすれば、「海へ」以降に『文藝首都』に発表された小説に、菅原が指摘したように、「分身」という主題に内包される「「〈〈俺〉や「おまえ」、「僕」を書くための〉言葉〉」の問題が、〈場〉との関係のなかでどのように展開されるのかも踏まえておく必要がある。

本稿は、以上のような課題を前にまず、詩と同時期に発表された「不満足」（『文藝首都』一九六八年二月）、「あなたを愛撫するユビ」（『文藝首都』一九六八年七月）、「日本語について」（『文藝首都』一九六八年九月）[4]を分析するものである。これにより、詩への視座も定まり、詩における〈故郷〉概念の厳密な吟味の前提が成されると思われる。

2 「不満足」および「日本語について」における「僕」と「社会」

「不満足」、「日本語について」、「あなたを愛撫するユビ」の主題はひとまず、次のように整理できる。「不満足」は書く方法の模索、「日本語について」は言葉の伝達不可能性というアポリアを踏まえた発語の可能性の模索、そして「あなたを愛撫するユビ」は一人称主体「僕」の存在理由の破綻を、それぞれ主題化したものである。

初期小説への先行評価に触れておく。六六年三月発表の「十八歳」を、中上の小説創作の筆頭に置く渡部直己は、初期「青春小説」の「「ニセ」と「嘘」の主題」に注目し、「灰色のコカコーラ」（前掲）に至るまで、主人公たちの「ニセ意識はまだ一種の防衛機制として作用」しており、それは主人公の「あたりに押し寄せる邪悪な表情をやり過ごすための知恵」として機能しているにすぎないと指摘した[5]。主人公（たち）の「防衛機制」を見出す渡部の観点は、「日本語について」および「愛のような」に関する高澤秀次の評価[6]にも通ずる。高澤は、「初期フーテン小説」の一つである「日本語について」に、「当時全

盛の高橋和巳風のアクチュアルで雑駁な観念小説の対極にある」「受動的な主人公の無力感」を指摘し、それを「反＝時代的な小説」とした。両者に共通するのは「あたり」や「時代」、すなわち社会状況との関係のうちに一人称主体を位置づける視点である。そしてここで一人称主体は、状況に「反」すること、ないしは「やり過ごす」存在として措定されている。しかし、このような「あたり」・「時代」と「僕」との関係図式に全ての初期小説が回収されるわけでもないだろう。先に整理したように、初期「フーテン」「青春小説」と分類されるテクストにも微妙な差異がある。したがって、「あたり」と「僕」との関係（渡部）、そして「時代」と「僕」との関係（高澤）という図式を参照しつつも、「あたり」や「時代」それ自体を改めて照準し、テクストに仮構される社会状況と「僕」との関係を具体的に見定めることの必要が生じよう。そこでまず「不満足」における「僕」と「あたり」（テクストに則すなら「社会」）との関係をみるが、そのために「僕」という一人称主体をめぐる先行研究を参照したい。三浦雅士は「不満足」の一文を引用し、一人称主体のありようについて次のように述べている。

僕はたぶん〈俺〉を主人公にして滑稽であり、しかもこの雨のふりつづける朝のようなしろい色彩をもつ抗いが満載された小説を書く。僕はカメラアイを思わせるメタファを多用して、〈俺〉そのものの存在をとらえ、〈俺〉の背後にある僕たちの世代をとらえるのか？　[「不満足」の一文―浅野]／ここにはすでに明瞭な方法意識がある。だが、末尾に付された疑問符がその方法を許してはいないのだ。小説は、したがって、その後に分裂した自己ともいうべき「僕」と「俺」に不毛というほかない会話を際限もなく強いてしまうのである。見る自分と見られる自分、書く自分と書かれる自分、見ることと書くことを意識したうえで見、そして書くこと。ここでは[自己言及の―浅野]悪循環そのものが主題と化しているのだ。[7]

ここで「不満足」は、「書く」・「見る」意識を持つ「僕」を表象し、「僕」の「分裂した自己ともいうべき」「俺」＝「見られる自分」の描出をめぐる自己言及の「悪循環」を指摘される。しかしこの指摘は、初出ではなく、初期小説を収めた短編集のテクストを根拠にするため、その有効性が疑われる。[8] 先に触れた菅原真以子も、「不満足」を「「僕」が「僕」の作り出した（登場人物としての）人格である分身的存在の「〈俺〉」とともに、雨の東京、中央線沿線をひたすら歩きつづけるというテクスト」と要約し、「海へ」以降の小説テクストへの「〈分身〉」という主題の継続性を指摘した。[9] が、初出を踏まえるなら「不満足」は、自己言及の「悪循環」を招き寄せる自己意識の分裂や「〈分身〉の主題」を通じた創作をめぐる自問の域を越え、むしろ「描写」方法への意思決定を提示していると言わねばならない。具体的に「不満足」を見よう。三浦が引用した「僕」の「分裂した自己」としての「〈俺〉」は、初出では匿名の三人称「K」となっており、ここで既に自己言及の「悪循環」とい

う三浦解釈は解除される。定本と初出の異同を確かめ、具体的に「不満足」の「僕」と「社会」の関係をみていこう。

（1）

［…］僕は〈俺〉【K】になにを発見したと言うのだろうか？　自然主義的な文章作法で描写すると使い古された修辞をしかつかえないような〈俺〉【K】という存在に対して…。／僕はたぶん〈俺〉【K】を主人公にして滑稽であり、しかもこの雨のふりつづける朝のようなしろい色彩をもつ抗いが満載された小説を書く【小説を書くだろう】。僕はカメラアイを思わせるメタファを多用して、〈俺〉【K】そのものの存在をとらえ、〈俺〉【K】の背後にある僕たちの世代をとらえるのか？【とらえるだろう。】／［…］／ナンセンスだ。滑稽だ。言葉など無意味だ。【僕の文体はフィンガーペインティングのようなものになる。それはなまの感覚でかかれた観念の絵だ。】

（2）

雨のふっている朝、傘ももたないまま、あてどもなく歩きつづける〈俺〉【K】を僕は克明に描写する。［…］／〈俺〉【K】の行動は、無意識のうちに示している反抗の一典型かもしれない。社会と言う曖昧な存在、〈俺〉【K】を失語症にして透明なおりに入れ、笑う権利、歌う権利、しゃべる権利、さまざまな権利をはぎとりにかかる社会と言う軟体動物の胃袋のようなものに対するせいいっぱいの反抗であるのかもしれない。／［…］〈俺〉【K】はあの小説の主人公のように、体の奥深い雑草の密生したところで内爆発しつづけるなにかを分析できなくて、雨のなかへとびだし、あてどもなく歩きつづける。／酔っぱらった〈俺〉【K】／デモの〈俺〉【K】／性交しつづける〈俺〉【K】／歌をうたえない〈俺〉【K】／ことごとくにナンセンスだ。愚劣だ。そんな事が人生の大問題だと言うのか？【僕たちの世代、あの戦争におぞましいとか、無念なとか、呪われてしかるべきとか云う修飾語をつけないで語る世代、挫折とか連帯とか転向とかそらぞらしい言葉とフーガのように歌いつづける兄たちにくらべて、鑑別所入りした後、抜け目なく分別をつかいわけることを知った世代、〝しかと〟の世代、僕はKにそれらのイメージを重ねながら、描写するだろう。】（波線＝定本加筆部分／【　】＝初出記述および定本削除部分（印付・浅野））

定本と比較しつつ、初出の志向を確定する。まず〈（1）・定本〉は、描写対象を「〈俺〉」とし、三浦も指摘するごとく、「方法」への懐疑と「方法」意識を持つこと自体を無化するように、「描写」それ自体を「ナンセンス」、「滑稽」、「言葉など無意味」と否認する述懐を導く。一方〈（1）・初出〉は、描写対象を「K」とし、彼を「自然主義的な文章作法」で「使い古された修辞」ではなく、「フィンガーペインティングのような」「文体」で「なまの感覚でかかれた観念の絵」にする「描写」を目指す文脈があり、「K」を「描写」する方法をめぐる逡巡の末、「文体」を決定する構成となっている。また〈（2）・初

出〉は、「内爆発しつづけるなにかを分析できな」いと解釈される「K」を、「僕」と同じ「抜け目なく分別をつかいわけることを知った世代」の代表とし、その「描写」を決意する「僕」を表象する。一方、〈(2)・定本〉は、酒、「デモ」、「性交」に時間を費やす「〈俺〉」の日常を再認する「僕」の視点から、「〈俺〉」のものとして分節化される日常を「ナンセンス」、「愚劣」とし、「そんな事」は「人生の大問題」ではないと反語的に示しつつ、その日常の否認の先に書記行為が成立することを示唆している。〈初出〉においては、「僕」の「世代」を代表する存在である他者の「K」を鏡とした「僕」の書く意志、またその「文体」決定の意志が確認される。また〈定本〉では、定められた「文体」による「描写」の成否をはぐらかしたまま、書く「僕」の自己内他者である「〈俺〉」の日常の否認を通した言語実践の水準が見定められて行く。〈定本〉に依拠すれば、自己言及の「悪循環」(三浦)にしか帰結しない「〈分身〉の主題」(菅原)も指摘できる。しかしそれに拘束されるなら〈初出〉における、定点性を持つ書記主体としての「僕」の決意は見過ごされる。すなわち、他者としての「K」に代表される「世代」把握の方法や、「僕」の「描写」への意志が不可視化される。

では、「世代」「描写」の意志は、何に向けられるのか。「Kの行動」を「無意識のうちに示している反抗の一典型かもしれない」と憶測していることから、それは、「社会」との関わりにおいて「世代」を位置づけることに向けられることがわかる。しかしこの意志を確認すればこそ「不満足」の限界点も指摘できる。「不満足」において「K」や「僕」の「世代」は、「社会と言う曖昧な」、「軟体動物の胃袋のようなもの」への「せいいっぱいの反抗」を「行動」に現す「かもしれない」グループとして、憶測の対象に据え置かれたまま、それ以上の「描写」は施されていない。それは「社会」が「曖昧」な「軟体動物の胃袋のような」ものとして、詩的に怪物化されていることと呼応する。すなわち「不満足」は、「世代」把握を具体的に遂行しながらも、「社会」の内実を不鮮明にし、そうであるがゆえに「社会」と「世代」の関係を憶測するしかないものとする、そして「社会」と「僕」との関係も曖昧にしてしまう限界を持つのである。では、「日本語について」は、これをどのように問題化しているのか。

注に付したように、「不満足」以前に書かれたと推定される「日本語について」は、「あなたは日本語をまったく理解できない外国人に出あった時、いったい日本語をどの単語から教えるのだろうか?」と始まり、この問いの現在に至る過去の再構成が大半を占める。

過去の「その頃」、学生でも労働者でもないノンポリの「僕」は、「反帝反戦学生統一戦線」の学生運動家に斡旋されたアルバイトに五日間を費やす。それは、ベトナム戦争に赴くアメリカ国籍の黒人兵を軍隊から脱走させるべく「士気を腐蝕」させ、「戦後の平和の中に住む若者」の「シンボル」とされる「僕」の生活を黒人兵にみせるというものだ。「僕」は、学生運動家の観念性に反発しつつ、ジャズ喫茶や学生デモをルドルフに見学させて過ごし、学生運動家とは異なる立場からルドル

フに脱走を勧める。ルドルフはこの後自殺未遂を起こすが、「僕」はそこで、「僕」とルドルフの顚末も「予測」していたとする学生運動家の言葉によって、自分も「実験」されていたと知る。これらの出来事は、ルドルフの自殺未遂に関わった「僕」を取り調べる警察官に向けた形式で叙述され、テクストは、「あなた」と呼ばれる聞き手の警察官と同位相に読者を繰り込みつつ、先に引いた問いかけも直接「あなた」に向けたものとして配置する。

さて、この冒頭の問いかけはどのように把握されるべきか。それに関して、「いま」の「僕」の次の告白に留意する必要がある。

> すくなくとも彼のことを語ろうとするのなら、僕はあなたにまず僕自身について語りはじめなくてはいけないだろう。僕がその外国人、たったひとつの日本語をしか知らない（僕が教えたその言葉も彼が理解できたとは思えない）黒人兵ルドルフ・L・ウィットを語るということ、すなわち僕自身を語るということにほかならないといまは思っている。

この告白は、「僕自身」とはどのような存在なのかを「あなた」に「理解」させる場として、五日間の出来事を読むことを要請する。まずは素直に、そこで「僕」がどのような存在として表象されているのかを読む。そして「あなた」、すなわち「社会」を構成する不特定多数の「あなた」にこの要請をすることの意味を確定し、「僕」と「社会」との関係を測量していきたい。

「僕」に特徴的なのは、「知識人のたまごのような顔をした勤勉で実直で左翼用語だけで脳細胞を肥大させた若者たち」である同じ「世代」の学生運動家らへの不信と悪意である。しかし「僕」は、政治学生と「僕」とが似ているという事実も発見している。

> 僕は僕自身の吐きだす英語の単語、民主主義とか「考え」とかが普通の学生たちのようにヒロイックで潔癖な性格をもっているみたいな錯覚を抱いていた。

「僕」はルドルフを前に、自らの言葉を政治学生と同じ構えからのものとして見出す。したがってこの自覚は、「僕」と政治学生との線引きが、ルドルフの前では不確かにさせられていることを証かす。テクストは、このような「僕」を表象し、「皮肉な口調で」「『若者』」の「衛生無害」さを「僕」に見出す学生らと「僕」とが同じ穴の狢でしかないこと、それゆえに「僕」の反発も、「僕」の「衛生無害」さをしか証さず、唾棄すべき「政治きちがい」の振舞いを補強する脱-政治化したものにほかならないことを指し示す。したがって逆にテクストには、過去としての五日間において、「僕自身の内部」の「果肉のように柔らかい感性の芽をふみあら」す「憎むべき敵」として学生らを仮想敵化し、「アメリカ」の「悪」と、「その戦争を遂行しているアメリカ兵」の「悪」を混同して彼らを「心理学

の実験材料にしてしまおうとするような感情」への反発を強めてゆくしかない「僕」の振舞を反省的に対象化する視座があると指摘できる。テクストに表象される過去の「僕」は、類似を糊塗して学生たちを悪魔化することとパラレルに、ルドルフに寄り添う存在として表象され、その敵意は、「僕」と「政治きちがい」との補完関係を隠蔽ししつつ、ルドルフ「理解」を盾とした自らの「感性の芽」を守ることに寄与するものとして表象されていることになる。したがって「黒人兵を彼らに利用させたくない」と思った「僕」の善意も、ルドルフを「心理実験」する学生運動家らへの敵意を強化する以外のものではないことになる。たとえ「僕」に、ルドルフとの関係を組み換える経緯が記されたとしてもである。

アルバイト当初、「動物をみつめるピグミーの少年」というように、偏見に基く人種差別的イメージでルドルフを捉えた「僕」の意識は、「いつでも観られている俺にもこの街にいる日本の若者を観る権利があるはずだ」というルドルフの言葉により刷新される。「僕」は、ルドルフを「普通のアメリカ兵」でなく「まず黒人 unvisible man」として承認し、その「心理状況を理解してやらなければならない」とした結果、「自分の感受性をたしなめ」た。この「理解」へのプロセスは、ブラック・アメリカンとしてのルドルフを「アメリカ兵」としてのみ捉える政治学生を峻拒する「僕」の根拠となっている。

しかしこの「理解」への変化も、自分の「感性」を「政治きちがい」から守るべきものとする「僕」の欲望を脅かさない。だから「僕」において、「僕」と「政治きちがい」との差異化の線が、ルドルフをブラック・アメリカンとすることで引き直されても結局、ルドルフを「感性」を脅かさない存在として措定していることに変りはない。そうであれば、「理解」を根拠に「僕」がルドルフに脱走を勧めるプロセスとしての五日間は、「僕」の錯誤とともにある純潔の保守が強化される時間としてテクストに構造化されていることになるだろう。

ルドルフの服薬事件は、この錯誤を暴露する契機としてテクストに仕掛けられている。その〈悲劇〉は、「政治きちがい」との差異化の不可能性を「僕」に突きつける出来事、すなわち、ルドルフが「僕」の「理解」を峻拒し、近づけると思った「僕」を「政治きちがい」サイドへ送り返す出来事である。しかし「僕」は、「政治きちがい」からも拒否される。彼らはルドルフの〈悲劇〉も、「僕」の変化も「予測」済みと言い、「感性」に由来する「僕」の変化も政治プログラム上シミュレーションされていたと明かすからだ。ルドルフの〈悲劇〉を〈悲劇〉とみる「感性」の「利用」を知ることは、「感性」を守ること自体が、政治プログラムに機能させられていたと知ることだから、守ることの無意味さに「僕」は直面せざるを得ない。この直面を経て「いま」がある。

ここでようやく「いま」の「僕」の問いかけを考察できるだろう。「いま」、五日間の出来事は「黒人兵の抱」く「不安定な感情を」「理解していると思」い、「ちいさな洗面所に顔をつっこんだまま野犬の遠吠えのような声をあげてぬるぬるした涙にひたってい」た過去のものとしてネガティブに再解釈され、さらに次のような「苦にがしさ」の根拠とされている。

あなたは幾つもの年齢の違わない同世代の若者が、言葉のへだたりや肌の色の違いや生まれ育った環境のちがいをもっているのを知りながらなおかつ相手との共通のなにものをもっていないということを自覚する苦にがしさを想像することができるだろうか？

生得的な「ちがい」を自覚することは、一般的に言えば、普遍的な「なにもの」かを抽出する弁証法の起点である。しかし「僕」は、「同世代の若者」の差異を認識しても「なおかつ」共通の「なにもの」もないことに気づき、普遍的な「なにもの」かを抽出するプロセスの不可能性を知る事態を「苦にがしい」とする。そしてその不可能性が「亀裂」と呼ばれ、ルドルフと「僕」との関係を「どう語ったら良いのだろうか？」という自問が来る。

僕はあなたに、その黒人兵ルドルフ・L・ウィットと僕たちとの間にあった亀裂、苛だちや諧謔や怒りや温い自己欺瞞を躰いっぱいにつめこみ、幼い茨の発育未熟な鞭をつくり自分の固い尻を叩き奮起させようとするのだがなお跳びこえることのできない亀裂を、どう語ったら良いのだろうか？

この「亀裂」は、「僕」とルドルフとの断裂面を指し示すに留まらない。「亀裂」を跳びこえ得る言語コミュニケーションの成立が幻想でしかなく、その可能性に期待を抱くこと自体への疑いが為す「亀裂」の深さが示唆される。しかしそれはまた、語りたいこととして「僕」に意識されてもいる。つまりここに、「跳びこえ」うるとは言えない「亀裂」を自覚する「苦にがしさ」を内包した発話行為への開かれが意識されるのだ。

この意識は、「政治学生」に代表される「世代」との関係を踏まえるならば、ある政治的特質を帯びると言えるものだ。「実験」が暴露される後日談をここで接続しよう。それは、「僕」の「感性」も、そしてその「感性」に由来する「僕」の変化も、そしてその変化を促す「僕」とルドルフとの関係も、政治プログラムのパーツとして合理化し、〈悲劇〉と「感性」の固有性を奪い取るものであった。もし「僕」が、この出来事に呼応した「感性」のネガティブ化に終始したなら、出来事の想起も「感性」の守りにしか繋がらず、「政治きちがい」が規定した「衛生無害」の「若者」像を裏書することにしかならなかっただろう。しかし「僕」はその先に、発話を位置づけることを意識化する存在とされている。とすれば、「僕」のその意識は、自らを「衛生無害」化する政治プログラムに吸収されない言葉の固有性を屹立させる政治性を伴ったものになる。それは「僕」の脱-脱-政治化の契機であり、「政治学生」とは異なる政治性を「僕」が帯びることを指し示す。したがってテクストは、「亀裂」を踏まえた発話行為への意識が、「僕」の発話を政治プログラム上の言葉と拮抗する強度を持つものとすることを指し示していると言えよう。「日本語について」は、「感性」に依拠する発話の限界を明らかにしつつ、しかしそれを否定しきらなくとも、政治プログラムに絡め取られない政治性を帯び

る発話行為の可能性を構造化していると言える。

しかしこの問いかけは、このような意識の読み取りを可能にする一方、その含意を踏まえるならば、「僕」の限界をも指し示す。この問いかけは、ルドルフへの「理解」不成立を知った「いま」、「理解」できなかった相手を語り得ないという「僕」の倫理、そしてそのことを「あなた」に伝えられるのか？　という懐疑を含意する。この懐疑は、ルドルフとの間での「理解」不成立の体験に起因しており、ゆえに「僕」は、「同世代」の「若者」・ルドルフとの「理解」不成立という出来事に学び、「あなた」への語り方がわからないという、伝わらなさへの不安に拘束されていることになる。そうであれば「僕」において、「同世代」の「若者」との「亀裂」が、そのまま「警察官」に代表される「あなた」という異「世代」との間にも反復されていると言え、ゆえに「僕」の問いかけは、ルドルフと「あなた」との絶対的な差異を抹消していることになる。この事態は、「日本語について」が「あなた」の内実を不分明にしていることに呼応するだろう。たとえ「あなた」が、テクスト末部で「警察官」だと種明かしされても、いや「警察官」と決定されるならなおさら、「僕」がルドルフと「あなた」との差異に無頓着であることが際立つ。この上で、外国人に対して「あなた」は初めにどのような「日本語」を「教える」のか？　そして「僕」に起きた出来事を「どう語ったら良いのだろうか？」という問いを捉えるならば、ここで「僕」が「あなた」を問いかけの対象とすること自体の問題も見えてくる。「僕」は「あなた」に「理解」されないかもしれない不安と懐疑のうちに、それでも「あなた」に問いを投げる。ただし、問う行為は、「理解」への望みを物語る。とすれば「僕」は、「あなた」が構成する「社会」が、「僕」の言葉を「理解」する共同体であることの自明性を疑っていないことになるのだ。

ここで明らかなのは、「不満足」が詩的かつ怪物的に、その攻撃性を可視化していた「社会」と、「日本語について」における「あなた」（「社会」）のありようとが、その不分明さにおいて通底することである。したがって「日本語について」も、「世代」との葛藤の末に「僕」固有の発話行為の次元は特定するものの、それが具体的にどのように「社会」に関わり得るのか、という問いに応え得なかったといえる。それは「社会」という場を、そしてそれを構成する「あなた」という存在を、具体的に構造化できない限界に拠り、ゆえに自らの言葉も具体的に把握し、また組織できない限界と言える。「世代」内差異を導き出せても、その「世代」に属す「僕」と「社会」との関係は、不分明のままなのだ。

さて、ここまでに確認できたのは、「あたり」を「やり過ごす」（渡部）志向を持つ叙述ではなく、「やり過ごす」ことを志向していないにも拘らず、「やり過ご」しているようにしかならない言説の限界である。それは、「世代」内差異を通じて「僕」の特異性を措定する意志に貫かれた叙述によって構成されつつも、その意志に反してテクストは、その特異性を「社会」との関りにおいて位置づけることを不可能にしている。それは、「不満足」、「日本語について」における「社会」の内実が不分明であること、特に後者は「あなた」＝「社会」への問い

かけにおいて、「社会」を構成する「あなた」と「同じ世代の若者」とを同一視してしまうことに由来しており、そうであるがゆえに、自らの言葉の水準も不分明のままにしている限界だと言える。では、「あなたを愛撫するユビ」はどうか。

3 「あなたを愛撫するユビ」における「僕」と「社会」

小説は、「地面よりわきあがる」「ざらざらした霧」の壁の向こうに「街が表情を喪っ」て後退するという状況のなかで、「逃げなくては殺され」るという強迫観念にさらされる「僕」の「夢」に始まる。目覚めて、その夢の中での「暴力」を再現する「言葉」の「意味」を考えつつ、一方で〈ユビ〉という謎の性玩具を探す始まりは、「街」と「僕」の「部屋」との二項対立を構成する。「僕」の「部屋」は、「夢」に拘束される「僕」の言葉への意識が充満し、〈ユビ〉という奇妙な性玩具に支配される私秘化されたトポスである。一方、「夢」に現れた「街」は、「現実」における「僕」の恋人、ノンポリの学生など同「世代」の人びと、そしてジャズ喫茶や純喫茶、そしてスト中の大学という空間を象徴するトポスである。

「僕」は「僕の部屋」に「〈ユビ〉」がある理由を分からないが、それを突き詰めることもない。ただその〈ユビ〉と共にある「僕」の異常性を自認しつつ、それを隠し続けなければならない強迫観念を駆動力として、「僕」の「生活」や「日常」を「総点検」するように「街」に出る。この「総点検」の視座がテクストを統べる。

その「総点検」は、「僕の日常ではな」く、「〈ユビ〉が介入してきた」「僕の生活の一部分」、「日常の細部」の変化＝異常化に伴い、その総体も変化しているに違いないという予断から行われるが、「〈ユビ〉と僕との奇妙な愛を内包した僕の日常からどういう変化を見いだすことはできない」とあるように、「細部」と「日常」全体との齟齬を明かにするばかりである。「奇妙な」「〈あいつ〉」への「小さな不安」を持つ「僕」は、「朝八時に眼をさまし」、「ほとんどアクセサリーの意味しかもちえない宇野弘蔵とか黒田寛一の著書を持って」「部屋を出る」ことのできる「日常」の無変化をこそ炙り出すしかない。そうであれば「総点検」とは厳密に、「異常」な「細部」が「日常」全体を「奇妙」にするはずだという予断を裏切り続けるプロセスという事になる。したがってそれは、「異常」な「細部」と無関係でないはずの「僕」の「日常」に、「異常」な「生活」に相即する「異常」さをこそ見出そうとする営みとなるだろう。事実、「街」の一部を構成する複数の同世代の人びと―例えば、恋人土志子、スト中の学生、喫茶店にたむろする学生ら―との差異化を遂行する「僕」のありようが、それを裏付ける。例えば、第一次羽田闘争で死亡した学生に関する記録映画鑑賞の場での学生との議論をみてみよう。

「僕」は、死者を熱心に語る「学生」に対して「諧謔で毛ばだった言葉でかわそうと皮肉っぽ」く、「「ああ、あいつは二人目のシャーマンになったわけだ、現代という時代の」」と言う。これに対して苛立つ「学生」に、「僕」は「機動隊が殺したとかの問題」でなく「もっと根源的なもの、僕達があいつをシャ

ーマンにしたててしまったということ」を認識せよと迫られ、その「僕たち」の「中に君も入っている、君はあいつに対してなんにも感じないのか！」と詰問される。それを受けて「僕の生活、僕の日常、とくり返しつぶや」く「僕」は、「学生」を「追いつめ」るために次のように述懐する。

あの学生の吐きつけたことば、[…] 根源的な問いかけ、現代という時代を真摯に生きる、甘い果肉たっぷりの言葉だ。でもいくら実存主義的ふうに問いかけても、あいつの問いは政治のまわりにぶんぶん勢いよく飛び回る蠅みたいなものだ、同伴運動にすぎないのだ。[…] あの学生は政治活動に参加してもデモの中で死んだ学生と同じように〝虐殺〟されるまで自己処罰のように〝根源的な問いかけ〟をくり返さなければならないという始末だ。

「学生」は、死者を「シャーマン」に聖化する「政治活動」に懐疑し、その当事者として、死者の「あいつ」との関係を「実存主義的ふうに問い」かける。しかしそれは、「僕」において非政治的かつ自虐的な悪循環を惹起するとして批判的に解釈される。この批判の枠組は、『自立の思想的拠点』を著した吉本隆明のサルトル批判の模倣である。

そもそも「僕」の「皮肉」は「学生」の「真摯」な「言葉」を「かわそう」とする反射でしかない。したがってそれは、「実存主義的ふう」な「問いかけ」への根本的批判とはならず、アクチュアルな「政治活動」に対する吉本的常套句の反復に過ぎない。そして、「皮肉」や他者の言説の表層的な繰り返しに重ねて「僕の生活、僕の日常、とくり返しつぶや」いているのなら、「僕」はただ、「僕」の「細部」の異常性に相即する「僕」を、「日常」での他者との差異化によりねつ造していることになる。したがって、他者との差異の確認は、それを遂行する「僕」の自己同一性を確認する素材として消費されるしかない。そして、他者がいる限りこの差異化が無制限に繰り返されるなら、「僕」は自らに自閉性をもたらすしかなくなる。「総点検」を続けたとしても、「僕」は常に、その「異常」さの確認を通してそれを強化しながら、「異常」さを問うループに嵌り込んで行くしかなくなるのだ。したがって、「僕」の「総点検」とは、「異常」な「細部」に「不安」を持つというアイデンティティを他者との差異を確かめてゆくなかで強化することであり、「不安」の沈静化が、他者との差異化を手段にしつつ、自らの「異常」を調停することで行われるものなら、これに反して「僕」の「総点検」には、手段の目的化という転倒も指摘できる。「不安」や「おびえ」の調停に向けた外部への踏み出し＝同「世代」との関りは、内部の強化のために消費される。そうであれば「僕」とは、「不安」や「おびえ」を言明しつつも、その調停を求めない存在として表象されていることになる。

しかしテクストは、他者との差異化が保障する「僕」の「異常」さを脅かす事態を「現実」として示す。端的に、「僕」を「異常」ではない、と宣告する「現実」に「僕」は直面するのだ。

次第に埃っぽい夕闇がおおいかぶさってくる空にむかって突き立った不恰好な煙突の上に、黄色のテントを張り、スピーカーを持った二人の男が立っていた。僕は煙突の腹にたれ下がったたれ幕を見、後頭部をブラック・ジャックでうちのめされたような衝撃を感じた。**あなたを愛撫するユビを販売中止にせよ！**たれ幕はひらひらふいてくる風にゆれていた。

「僕」だけに所有されていると思い込まれていた「〈ユビ〉」が、「販売中止」を迫られるほど大量生産されていた事実に「僕」は「衝撃」を受ける。特に「〈ユビ〉」を隠しておかなければならなかった恋人すら、それを知っていたという事実は、「僕」のこれまでの行いを無意味に帰する転回点となる。この転回は、「日本語について」でのルドルフの自殺未遂に衝撃を受ける「僕」のありようを、予測済みのものとした「政治学生」らの言葉を知る、という仕掛けと同質のものと言える。それは、一人称主体の自己同一性を保障する思惟および言動の無根拠さを暴露するものに他ならないからだ。

「そこに宣伝がのっているわ」／新発売／あたらしいあなただけのペット／あなたの髪を愛撫する／あなたのしなやかな手を愛撫する／僕はもう完全にうちのめされていた。／[…] その写真、あいつと同じ仲間の写真がここにある。／あなたを愛撫するユビ／この超現実的な愛撫を／あなたもおためしになってはいかがですか？／[…] 子供の手首のような〈ユビ〉男の手首のような〈ユビ〉女の手首のような〈ユビ〉が写っている。僕の驚きはもう恐慌状態に近かった。／※全国で一万名ほどの方が、〝あなたを愛撫するユビ〟の愛撫を試されています／小さな活字でこう書いてあった。

「男」であれば誰もが持つ商品として「〈ユビ〉」を示す「宣伝」の文言は、「日本語について」において、「僕」の言動を「予測」していたという「政治学生」の言葉に匹敵するだろう。それは「僕」の「異常」さ、「僕」の「感性」が担保する「僕」の独自性を否認する言説として共通する。そして、「僕」の言動の無根拠さを暴露する「宣伝」は、不特定多数の「あなた」（「日本語について」）が、「〈ユビ〉」を持ちうる大衆消費社会の「現実」を露呈する。したがって、「不満足」で「軟体動物の胃袋」として抽象的に怪物化され、「日本語について」でそのイメージを払拭されなかった「社会」は、ここで大衆消費社会に限定され、「僕」の特異な「不安」を飲み込む主体として具体的表象を与えられたことになる。

だからこそ重要なのは、新たな「不安」が「僕」を支配する事態が記述されることである。「僕」のみのものという確信に拠る「異常」の意識と相即する「不安」が解消されても、「僕の部屋には第二、第三の〈あいつ〉がやってくる」「不安」が「僕」を襲う。この新たな「不安」は、「僕」が「社会」と交渉する契機と言えないか。まず「僕」は、その具体的方法として「〈ユビ〉」の不買、廃棄運動としての「ハンガーストライ

キ」を思う。しかし「僕」は、増殖する「〈ユビ〉」のイメージを増幅させながら、「諧謔の棘を含んだ笑いの衝動に体を突きあげられ」、こう叫ぶ。

> […]「僕はこれから肥るんだ！」と叫ぶように言った。／[…] 僕はこれからどんどん肥ってやろう、体中が脂肪でくるまれるまでだ、顔がフットボールのように脹らみ、首がほとんどなくなり、胸と腰と腹に十センチも二十センチもの脂肪の膜をはる。僕はどんどん肥ってやろう。[…] 陰毛の草むらをおり、性器にたどりつくだろう。でもあいつは僕の性器をみつけることができない。

「僕」は、「〈ユビ〉」という商品が流通する「社会」に対して、「脂肪」で皮膚を厚くする防御を選択する。ここで「防衛機制」（渡部）という指摘の有効性がみえてくる。しかし、この「防衛機制」は、渡部が言うように「周囲」、「あたり」の「悪意」を「やりすごす」と言うよりも、それをやりすごせない地平に「僕」が存在するという自覚を繰り込んだ上で成立している。したがってこの「脂肪」の壁は、「僕」の特異性に由来する言動の独自性への過信を、みずからの思考回路から締め出した上で求められるものと考えられる。そうであれば「脂肪」とは、「〈ユビ〉」を回避することの不可能性を踏まえた上で、すなわち「〈ユビ〉」という商品との対峙—大衆消費社会の規範を「僕」の「部屋」に引き入れる—を回避しないことを選択した上で、「不安」にさらされながら、それと関り合う〈言葉〉の比喩として捉えることも可能だろう。「社会」は相変わらず「僕」を飲み込むことに変りはないが、それは、経済原理に貫かれた場として具体性を伴いつつ、それに飲み込まれつつ交渉することも可能な圏域に「僕」が参入する志向が見出されると言えるのだ。

したがってここで、「日本語について」の「あなた」と「僕」との境界はなくされ、むしろ「僕」に「あなた」たちのうちの一人としての属性が帯びさせられることで、不特定多数の「あなた」が構成する「社会」の一人としての「社会」との関りという問題の可視化が指摘できるだろう。

4　今後の課題—初期詩へのアプローチの確定

本稿の検証において、「不満足」・「日本語について」と「あなたを愛撫するユビ」とのあいだに、「社会」表象の水準、および「僕」の内実の変化が確認された。この変化のあいだを断層と名付け、ここで中上の作品年譜を想起してみよう。

第一次羽田闘争（一九六七年十月八日）における京大生・山崎博昭の死への追悼詩とも読める「四つの断章からなる季節への試み」が、一九六八年二月十一日に発表され、この直前に「不満足」が『文藝首都』に発表される。そして、この「四つの断章からなる季節への試み」から二ヵ月後の四月十四日に「四十五回転盤季節と若干の問題」、そして、その一ヵ月後の五月十九日以降、ほぼ一週に一作のペースで表題に「季節」と名のつく詩が発表され、そして六月十六日の「季節への提言及び悲歌」と同時期に小説「あなたを愛撫するユビ」が『文芸首

都』に発表される。その後『さんでージャーナル』には「チェコ問題についてのコメント」（八月二十五日）が発表され、そこで中上は自らの政治的スタンスを明示し、また「僕自身のための弁明と嘘つき」（八月三十一日）で、これまでの発表作品を批判的に自己解釈し、六八年九月一日に「故郷を葬る歌」を発表する。

このような経緯と本稿の小説検証を踏まえるならば、「僕」を「あなた」の一人として位置づけること、そして「社会」の具体的表象に相互補完的に関わるテクスト群として詩を捉えられるのではないか。であるなら逆に、詩で「故郷」と名指される〈場〉を〈社会〉とし、その〈社会〉と一人称主体との関係を照準すれば、中上の「出自」をめぐる感情に則って「故郷」表象を理解する傾向に距離を置きつつ、その概念を厳密に再現できるのではないか。「不満足」、「日本語について」と「あなたを愛撫するユビ」との境界線上に位置づけられる詩は、「出自」の共有という条件を満たす人びととの関係が交錯する〈社会〉としての「故郷」それ自体を、そしてその「故郷」と一人称主体との関係を、どのように構造化しているのか。これは即ち、中上において「故郷」が創作の資源として仮構される始まりを見定めることに繋がり、また中上の初期創作において、「出自」を描く「課題」が見定められる道筋を明らかにする重要な視座になると考えられる。

注

（1）高澤秀次『評伝中上健次』一九九八・七、集英社。

（2）『文藝首都』には詩部門もあった。にもかかわらず、中上が詩を『さんでージャーナル』という地方版新聞にほぼ限定して発表し、なおかつそこに「故郷」というモチーフが浮上するのならなおさら、高澤の筋書きは、中上の小説および詩テクストを通して、批評的に捉えなおされつつ、具体的に再現されなければならない。

（3）菅原（須賀）真以子「中上健次「海へ」―言葉を巡る遍歴―」『昭和文学研究』第五四集、二〇〇七・三。

（4）「日本語について」は、『文藝首都』（一九六八年九月号）に発表された。その執筆時期は高澤秀次によって次のように推定されている。「この作品の初出は六八年九月号の『文藝首都』であるが、それは群像新人賞に応募、落選の末、掲載されたものであった。新人賞の締切からして、中上は六七年の十月までには、この作品を書き上げていたことになる」（高澤・前掲書）。本稿はこの推定を受け、「不満足」と「日本語について」の近さに留意している。

（5）渡部直己『かくも繊細なる横暴　日本「六八年」小説論』二〇〇三・三、講談社。

（6）高澤前掲書。

（7）三浦雅士『主体の変容　現代文学ノート』一九八二・一二、中央公論社。

（8）『十八歳、海へ』（一九七七・一〇、集英社）と題された初期短編集は、「十八歳」、「ＪＡＺＺ」、「隆男と美津子」、「愛のような」「不満足」、「眠りの日々」、「海へ」の順で小説が配置されている。「MESSAGE 77」と題された後書きにおいて中上は「手直しは部分にとどまった。これは内なる今一人の柔らかい肉を持った年若い作家の、作品集である。秩序など無意味だ、破壊へ、混乱へ。この年若い作家と今の私をつなぐのは、その想いである。」と記している。しかし、「愛のような」は「不満足」の前に置かれ、「不満足」には大幅な改稿が施された。したがって、この一九七七年の意図を措き、初出に基く分析を行わなければ、中上の初期創作を理解することはできないだろう。

（9）菅原前掲論文。